である．折悪しく大震災におそわれた時期で，調査にも資料整理にもとりわけ苦労が多かったことだろう．過去に記録や標本があるものの，今回確認できなかった植物がたくさんあるのは当然の成り行きだが，新記録の植物も数多く見つかったという．自然の調査というものが,「これで終わり」というものでないことを実感させる．内容は1.調査地域の自然環境，2.植物調査研究史，3.植物相の特徴，4.六甲山地の絶滅危惧植物，5.生物多様性の保全をめざして，6.六甲山地の植物目録，7.文献，付表1.採集地点一覧，付表2.研究史年表（1879～1960年)，索引である．第3章では注目される植物として78種類が，分布図つきで45頁にわたって詳述されている．その中で，絶滅危惧種の選定に「昔はたくさん見られたのに今は...」と感覚的に判断することのあぶなかしさの例として，タカサゴソウのケースが述べられている．本書の主体をなす植物目録は175頁にわたり，シダ植物以上1693種類が記録され，植物名に続いて産地と標本が列記されている．検索表や形態の記述はなく，産状や分布についてごく短いメモがついていることがある．標本の大部分は頌栄短期大学の収蔵品で，引用は採集者略号と採集番号，頌栄短大以外の標本は必要に応じて所蔵表本室記号や日付が付加されている．過去に記録があるが確認できなかった種類については，脚注にコメントされており，著者の判断で「誤認と思われる」というような記述も少なくない．従来の植物誌は先人の記録に上乗せして種類数の増加を単純に誇る傾向があり，こういう否定的な記事はなかなか書きにくいものであるが，自然を正しく認識する上で是非必要で，後続出版物が見習ってもらいたい．付表2では主要な植物の記録や主な行事，出版物の刊行時点が列挙されている．全体として簡潔で手堅い印象で，地域植物誌の一つの行き方を示すものだろう．注文をつければ，標本の引用が簡潔に過ぎてわかりにくい．データベースとの関係と思うが，採集者の略号がたくさんあって，一々凡例を覗かないとわからない．ページを切り離して作業に使おうとすると（そういうことをやる人間がいるのである)，面倒なことになる．略号はデータベースには便利だが，人が読むときには翻訳しておいてくれた方がよい．機関略号程度なら，数が少ないからどうということはないが... データベースの立場からは，人名の略号は姓を先頭にしておいた方が整理に便利なのではあるまいか？また，採集者が複数のときには一々それに対応した略号を用意しているが，これは将来行き詰まる心配がある．もう一つは採集地点一覧で，行政地名でリストされているのだが，他所者には具体的な位置の見当がつかない．これは地図に図示してほしかった．連絡先は次のとおり．神戸市公園緑化協会．651-0083　神戸市中央区浜辺通5-1-14　神戸商工貿易センタービル（Tel 078-232-4461 Fax 078-232-1498)．(金井弘夫)

六甲山は植物の豊富な所として知られ，昔からの多くの人が採集に行っている所であるが，今回それらの成果を纏めて発表したものである．現地調査以外に京都大学，都立大学などの所蔵標本も調べ，遺漏なき完成を目指して纏められている．シダ植物，被子植物の野性植物1693種，帰化植物266種が記録されている．六甲山は宅地や砂防ダムの造成のため著しく荒らされていて，過去に採集されていても，現在は見つからないものもかなり存在するようであるが，過去に採集された標本は，その地域の地域のかつての環境を示す上で貴重なものである．多数のカラー写真と，稀少な植物の標本の写真が載せられていて，一地域の植物誌としては豪華な本である．六甲山で注目される76種の植物の解説が付けられ，その過去と現在の状態，近畿地方での分布が述べられているのは貴重な記録である．本書は地方の植物誌を作る場合のよい例を示すものであろう．このような形で兵庫県植物誌が作成されることを期待する．

(山崎　敬)

□山岸高旺・秋山　優（編): **淡水藻類写真集 第20巻**　100pp．1998．内田老鶴圃．¥7,000＋税．

淡水藻の同定を主な目的として作られた写真集で，顕微鏡写真による藻体の全体像と分類上の特徴となる部分の拡大写真，それに必